国際社会文化研究所紀要　第6号（2004年）

ソーシャルワーカーへの支援スキル訓練の研究
――コンピュータ・シミュレーションを用いた実践教育の展開――

太田義弘[*1]　野澤正子[*2]　中村佐織[*3]

Research to the support skill training for social workers:
Development of practical education by using a computer simulation

Yoshihiro Ohta[*1], Masako Nozawa[*2] and Saori Nakamura[*3]

The purpose of this research is reforming completely the effective training methods of support skills of a social worker who works in the field of social welfare institutions based on the peculiar view and way of thinking which are called social work practice.

By utilizing a computer as the support tool called "Ecosystem project," it is for extending the knowledge and view to social human life involving a man and his environment which a social worker needs in order to support a client. On the other hand, it is trying to aim at effective training to the specialized support skills and methods of promoting them.

Therefore, the contents consist of the following.

① Developing the "Ecoscanner" as an educational support tool.
② Establishing the case study method using an educational support tool.
③ Grasping comprehensive, integrative view and method for understanding a human life situation.
④ Learning how to collect necessary informations and knowledge about the client's situation.
⑤ Offering the opportunity to train self-awareness and the consciousness as professionals.
⑥ Offering the opportunity which can learn support skill practically.

Ⅰ　はじめに

際限のない社会の発展が人間の社会生活を複雑・多様化してきている。21世紀は社会福祉の真贋が問われる時代である。いうまでもなく変質し変貌する社会生活に対応して社会福祉の制度や政策の整備・拡充を前提に，社会福祉という施策を人間の社会生活のなかに具体化し，実感できる成果が問われる時代になってきた。

それは制度・政策としてのハード福祉に対して実践活動というソフト福祉，つまりソーシャルワーク実践の成果が厳しく問われる時代を意味している。そのためには何よりソーシャルワーカーの

＊1 元社会学部教授・大阪府立大学名誉教授・関西福祉科学大学大学院教授，＊2 社会学部教授，
＊3 元社会学部非常勤講師・京都府立大学助教授

実践能力の開発や向上さらに後継者養成としての実践教育が問われているところである。これらは目下のところ現任訓練やスーパビジョンさらに社会福祉士の資格教育などに期待されているが，課題は山積している。その中でも最大の課題が，ソーシャルワークの実践教育いわゆる社会福祉援助技術の科学的な推進方法と教育訓練の課題である。

これらの動向をにらみながら，本研究のねらいは，ソーシャルワークの固有な視野や発想という原点に立脚して，社会福祉の実践現場で活躍するソーシャルワーカーの支援スキルの訓練方法を刷新しようとするものである。特にエコシステム構想という支援ツールを活用した方法によって現代社会が必要とする価値意識や人間と環境をめぐる社会生活への高度な知識や視野を広げ，専門的な支援スキルの展開や方法の推進から開発へと効果的なトレーニングの機会の提供を目的にしたものである。

Ⅱ　本研究の課題

1　ソーシャルワーク実践研究の焦点と目的

新しい社会福祉法の制定で制度・政策としての社会福祉に対してソーシャルワークの重要性や専門性・科学性が再認識されるようになってきた。また社会福祉士の国家資格教育でも社会福祉援助技術を最重要科目と位置づけ講義・演習・実習に膨大な時間を充当してきている。しかし，教育現場では理論や方法の解説と教材を用いた手探りの実地体験学習が中心である。また実践現場での指導も日常的な業務の見学や勘と経験に基づく実践への参加という実習生の自主性に多大の期待を寄せた属人的な教育訓練が中心である。

かねてよりソーシャルワーク実践の科学的推進と方法の専門化を確立しようと継続研究を重ねてきた。そこで今回はソーシャルワーク実践研究の焦点を支援スキルの訓練方法に置くとともに，実践研究の成果を教育訓練場面へとフィードバックし，支援スキルの訓練方法を刷新しようとするものである。

もともとソーシャルワーク実践の科学的かつ専門的な研究は，支援過程を深化させた考察によってはじめて可能になることから，ジェネラル・ソーシャルワークという固有な視野と発想のもとに，その理論を展開できる方法としてのエコシステム構想を展開してきた。それは実践場面で利用者の生活課題の解決を科学的に支援するところに大きな意義がある。

エコシステム構想とは，この生活支援への視野と発想という理論を具体化して実践展開への架け橋となる概念と方法である。それは中範囲理論と呼ぶことができる支援ツールを具備した方法概念であるが，利用者自身とソーシャルワーカーが出会い参加し協働する場面にコンピュータを導入して，支援情報を整理して提供し，利用者支援を科学的に拡充整備しようというアイデアである。

この構想のもとに本研究の前提になる目的を以下のように設定し，継続研究を重ねてきている。

(1)　実践行動概念からなるエコシステム構想の具体化
(2)　支援過程の展開方法の科学科と専門化
(3)　生活状況のビジュアル化を通じたエコシステム的把握
(4)　支援サービスの適正・迅速・精緻化
(5)　利用者参加による課題解決の促進
(6)　科学的多目的支援ツールの開発

などである。

これらをふまえてソーシャルワーカーの支援スキルの訓練と，社会福祉専攻学生の臨床訓練を事例研究でのシミュレーションから可能にしようと，本研究での具体的目的を

(1) 教育支援ツールとしての「エコスキャナー Ecoscanner」の開発
(2) 教育支援ツールを用いた事例研究方法の確立
(3) 生活状況理解への包括・統合的視野と方法の把握
(4) 必要な情報の収集と知識の習得
(5) 専門職意識の涵養と自己覚知への機会の提供
(6) 適切な支援スキルの実践的習熟への支援

などに置いてきた。そしてソーシャルワーカーの支援スキル訓練方法にコンピュータを導入することから，ソーシャルワーク実践教育に新風を吹き込み方法の刷新をしようとしている。

2 ソーシャルワークと生活支援への視野と方法

まず最初に考察の基点であるソーシャルワークという実践行動概念を紹介しておきたい。すでに機会あるごとに特性を一つの文章として視点・目的・方法・過程などから構成される概念を提示してきた。これを定義と考えているが，その特性理解を容易にするための説明概念である。

「ソーシャルワークとは，利用者固有の生活状況を基点に，より豊かな社会生活の回復と実現を目指し，制度としての社会福祉諸サービスの提供を通じ，利用者による課題解決を可能にする支援活動の展開と，他方では，社会の発展に対応した社会福祉の維持と，その諸条件の改善・向上を目標にした支援活動システムの展開過程である[1)]。」とまとめておきたい。

ここ20数年来主張してきた考え方で，用語や表現を部分的に微調整してきた経緯はあるが，その特徴はジェネラル・ソーシャルワークという包括・統合的な概念を意図したものである。これを図解すると図1のように概要をビジュアル化できる。そして，その基本を次のように整理することができる。

(1) 視点――人間の固有性と主体性を尊重した利用者中心の視点
(2) 焦点――人間と環境が織りなす固有な生活世界 cosmos をとらえる生活概念

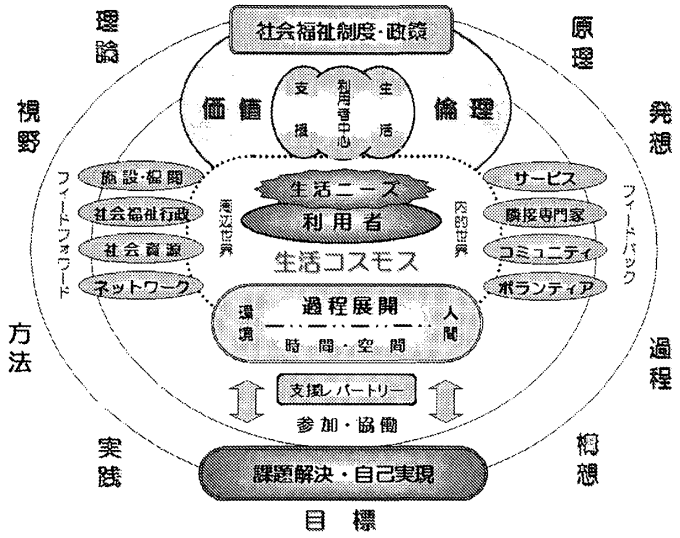

図1 ソーシャルワーク概念の図解

(3) 目的——より豊かな社会生活の回復・維持・向上と自己実現への支援
(4) 手段——社会福祉諸サービスの提供を通じた具体的課題の解決
(5) 方法——社会的自律性の支援を基本とした科学的方法
(6) 運動——社会福祉諸サービスの維持と改善・向上へのフィードバック活動
(7) 過程——ミクロからマクロへ循環するネットワーク活動を通じた支援の展開過程
(8) 特性——専門職業者による人間と環境への支援活動の展開

などの諸点から構成される実践行動概念である。

さてこのソーシャルワークの特性を表す鍵概念にもさまざまなものがあるが，その中でも一大課題が「生活支援」という独特な焦点と方法からなる概念である。この用語には二つの大きな意義がある。一つは人間理解への価値意識と姿勢から，その「生活」を人と環境さらに時間と空間から独特な経験や事実で構成されるその人固有の生活世界 cosmos として理解しようとする意図と，もう一つはその生活への「支援」という概念である。支援とは，利用者自身とその特殊な生活状況の理解に立脚した方法を重視した概念である。したがって制度や政策に基づいたサービス提供という提供者側の援助概念ではない。利用者の生活コスモスで自らのもつ問題解決能力を育み自己実現へと進展する過程に，支援者が参加・協働する姿勢と態度，方法と技術としての支援を重視する支援概念である。

後者の支援概念については，文献[2]を参照願うとして，ここでは前者の支援の焦点になる「生活世界」に触れておかねばならない。生活とは身近な日常性の中で出会う具体的な事柄から構成されるもので，当人にとっては現実的な広がりや内容や流れをもつ非常にトータルな概念である。しかし，それを科学的に解明し把握することは，容易なことではない。それだけけに生活については関連諸科学の領域から，それぞれ固有な研究が深められているが，ソーシャルワークにとって生活理解とは，まさに利用者支援という実践目的への焦点そのものということができる。

かねてより生活支援を目標にしたソーシャルワーク実践に関して，支援過程研究という課題に焦点化した考察を展開してきているが，そのためには生活をどのように理解し考察するかが一大課題になる。過去20数年に及ぶ研究経過は，支援過程の考察と同時に，一方では支援の焦点となる生活コスモスという包括・統合的状況へのアプローチを重ねてきた。一つは生活を構造化して生活領域・生活関係・生活内容から把握しようする試み[3]や，さらに生活をシステム分析してエコシステム概念からシミュレーションで把握する試み[4]などの試行研究を継続してきている。

生きざまとしての生活を当事者の世界で正確にとらえることは不可能であるが，その実体に肉迫することは可能である。このようなありのままの生活する姿を，利用者とソーシャルワーカーとが参加・協働して把握することからソーシャルワークの生活支援は始まるといえる。生活理解は単なる目的ではなく，支援過程の推進方法や課題の解決から自己実現というソーシャルワークの目的そのものを把握し評価する課題でもある。

3 エコシステム構想と支援ツール

ソーシャルワークとは，その人の固有な社会生活に焦点を置き，包括・統合的な視野と発想で課題の解決や自己実現を支援するために，社会サービスを開発・提供し，利用者との参加と協働の過程を推進する支援科学であると考えられる。そのための実践理論と科学的方法および支援ツールと

を具備した固有の実践行動概念がエコシステム構想である。

ソーシャルワーカーとして支援にかかわることの固有性は，利用者の生きる特殊で個別かつ固有な生活世界からの視野と発想で人と環境を含む利用者の包括・統合的な生活を修復し再構成することにある。そのためには利用者の内面生活から家族や近隣さらに資源や施策まで，利用者の目線で課題解決へと利用者自らの取組を支援し，社会福祉サービスをコーディネートするところに固有な焦点がある。

その利用者の目線から人や環境へのアプローチを包括・統合的に指向する方法概念をジェネラル・ソーシャルワークと呼んでいる。それはソーシャルワークが単に社会福祉の援助技術だと安易に理解され，明確な発想・目的・対象・方法・過程への概念ももたずに一過的な処遇術と思いこんでいる現実を払拭しなければならない。改めて生活支援というトータルな視野と発想から，ジェネラル・ソーシャルワークという実践方法のもつ固有な概念特性を，次のようにまとめておきたい。

(1) 原点――利用者の社会生活と実存性の尊厳
(2) 目標――課題解決と自己実現への社会的支援
(3) 視座――生活コスモスへの視野と方法
(4) 理論――生活コスモスへのエコシステム理解
(5) 発想――支援方法の学際的科学化
(6) 手段――支援過程の推進を補足する支援ツール
(7) 方法――支援過程への利用者参加と協働
(8) 展開――実践理論の行動概念化

社会生活と生活コスモス，実存性と自己実現，生活支援と支援科学，エコシステムと支援ツール，支援過程と参加・協働，包括・統合化とフィードバックなどがジェネラル・ソーシャルワークの特性を担う鍵概念として指摘できる。

これらの特性を支える枠組みは，生活コスモスをとらえ利用者の実存を支援するための理論と方法である。それは生活のシステムや営みを生態学的に理解することから成り立つエコシステム理論といえるものと，それを支援過程で展開する方法とである。これらの理論と方法からなる実践行動概念をエコシステム構想と呼んでいる。

この構想を推進する考え方は，利用者の実存性の尊重と自己実現の支援という基本的な姿勢にある。そのためには勘や経験という属人的能力のみに依存するのではなく，利用者の現実認識や支援方法の普遍化が必要である。この基本姿勢で支援ツールを用いて科学化された支援方法がエコシステム構想である。

次に図2のごとく構想展開への手段としては，支援ツールを導入し，支援過程の展開を補足・科学化しようとしている。複雑な生活状況の積み重ねと過程であるエコシステム状況を数量化した情報からコンピュータで解析し，支援過程での変容をシミュレーションし，ビジュアル化して支援方法に役立つ情報を提供しようという構想である。

次にエコシステム構想の推進方法であるが，利用者の主導性を支援しつつソーシャルワーカーの参加と協働のもとに支援過程を深め，局面を構成して積み上げる支援過程の推進方法に，専門性や科学性が問われる成果を発揮することができる。この推進方法に支援ツールとしての情報処理シミュレーションを導入し，実践方法の科学化を促進しようとしている。

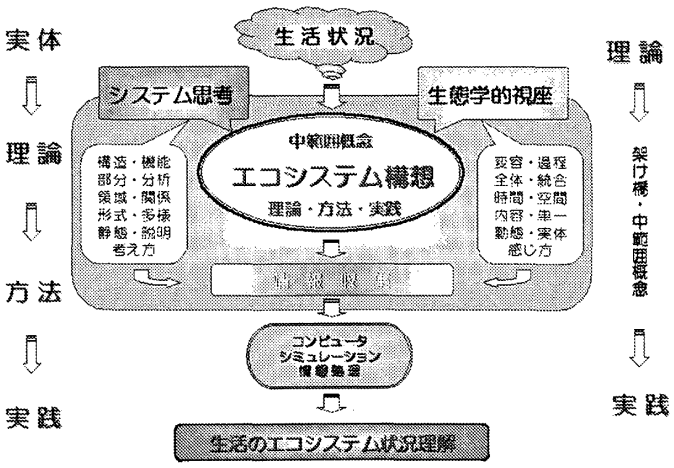

図2　エコシステム構想の図解

そして再びエコシステム構想の展開は，前述のごとく支援科学群を前提に理論と実践の包括・統合化を目指した支援科学としてのジェネラル・ソーシャルワークを基礎にしている。それは実践理論と方法を具備した中範囲理論であるエコシステム構想を，メタ概念から具体的な支援行為へと支援ツールを介して展開し，利用者と支援者とが参加・協働する支援関係を実践として展開することを意味している。

本研究は，この利用者支援への参加と協働過程の展開構想を，ソーシャルワーカーの支援スキル・トレーニングに用いようとしたもので，その第一義的目標は支援ツールを活用して，事例考察から利用者支援へのシミュレーションを学習場面で展開することにある。教育・訓練場面でのトレーニング担当者や参加者と自らの情報処理シミュレーション結果を比較考察し，利用者理解を深め，支援過程の展開を評価し，課題解決への模索を科学化することによって，支援スキルをより確かなものに熟成することをねらったものである。　（太田義弘）

Ⅲ　支援ツールの目的

1　教育支援ツールの目的

エコシステム構想とは，生活支援という視野や発想への理論と具体的な実践の架け橋となる概念と方法[5]と考えられている。具体的には，利用者システム[6]とソーシャルワーカーが協働して彼（彼ら）の生活状況をコンピュータを駆使しながら整理し，有効な支援を行おうとする考え方である。

かつてソーシャルワークでは，1970年代以降から「生活の視点」こそが独自な専門性を標榜できる観点としてさまざまな場面で強調されるようになった。しかし，その一方でソーシャルワーカーの実践には，生活の視点や生活の重要性が強調されるものの，旧態依然とした支援方法が用いられ，生活の視点を具体化する新しい方法はほとんどみられなかった。それは利用者システムの固有な生活状況を包括・統合的かつ生態的に捉えようとするには，多面的で大量の情報整理を可能にする道具としてのコンピュータが必要であるため，それを用いた方法の開発がなかったからである。

そこで本研究は，こうしたソーシャルワークの今日的課題を解決し，生活支援の理論に基づく具体的な方法を模索するための試みである。またそれは，最終的に利用者の課題解決とともに，他方ではソーシャルワーク実践でのコンピュータ・ツールを用いた実践支援システムの構築を目的にしている。そのため1998年から太田らを中心に若手研究者たちや民間企業のコンピュータの専門家集

団とともにエコシステム研究会を発足させ，コンピュータ支援ツールの開発[7]を行ってきた。しかしその研究過程で支援ツールを実践に活用するには，エコシステム構想を理解し支援ツールを使いこなすソーシャルワーカーの教育や養成が先決であることも明白になってきた。

近年，現場のソーシャルワーカーたちは，自らの独自な方法の獲得や確立を目指しスーパービジョンや現任訓練を重要視し始めている。しかし，事例研究演習の多くは，その事例の個別で固有な側面にのみ着目し分析・考察するのみで，個別の事例考察から一般的な方法・技術の獲得や向上を結びつける過程や方法は，課題として残されたままである。例えば，①生活の視点が強調されるもののスローガン化し，その概念や理論が十分理解されていないこと，②利用者システムとしての生活コスモスを理解するツールや演習プログラムがなかったこと，③ソーシャルワーカーたちは対人支援へのコンピュータ活用に抵抗感を抱いていたこと，などの問題を指摘しなければならない。

これらへの視野や発想でチャレンジしようとしたのが，エコシステム構想である。それはコンピュータ教育支援ツール（以下教育支援ツール）を用いた演習によって，初めて問題解決の糸口が開かれるように思うからである。

そこで本研究では，ソーシャルワーカーやそれを目指す学生たちがエコシステム構想を理解し，教育支援ツールを用いた生活支援情報アセスメントの必要性をシミュレーション体験から，実感してもらう実践訓練が不可欠だと考えたのである。今回は，多目的支援ツールである「エコスキャナー」を教育支援ツール用に改良し，新たな実証研究を重ね，コンピュータ支援による実践スキル訓練方法の獲得とツールの実用化について検証してきた。

特に今回の研究は，2002年度の龍谷大学国際社会文化研究所での共同研究に採択された「社会福祉援助技術への訓練方法の研究――コンピュータ支援による実践教育――」としてまとめたものである。実証研究部分では，これまで実施してきた大学生や大学院生と比較しながら愛知県農業協同組合中央会（以下JA愛知中央会）職員（ホームヘルパー，ケアマネージャーなど）への現任訓練演習から，その結果をまとめ実践スキル訓練としての効果やその課題を明確にしたものである。

2　教育支援ツールの概要

まず，今回の実証研究では，ソーシャルワーカーたちがエコシステム視座を明確にするためにアセスメント方法に焦点化した事例演習を行ってきた。一般に教育支援ツール自体も実践支援ツールと同様，演習プログラムを組み立てる側によって多目的に活用することが可能であると考えられている。人間の固有で複雑な生活状況を説明する概念であるエコシステム構想は，アセスメント方法[8]によって具体化されると理解できる。そこで，アセスメント方法の習得とともにエコシステム視座を用いた生活状況や生活問題の把握，生活支援の計画化を可能にさせる思考枠組みを獲得できるような演習を行ってきた。

教育支援ツールは，すでに述べてきたように1998年から何度も改良を重ねて開発してきた多目的コンピュータ支援ツールの一つである。それは教育支援用に作成された多様な事例を用いることによってシミュレーション演習を可能にしようと，さらにエコシステム情報についての質問や回答の作成と改良を重ねてきた。

さらに実証研究から質問それ自体がイメージできない場合に共通認識を深めるため質問回答判断マニュアルを作成するなどの工夫をしてきた。また教育支援ツールは，事例の情報管理と演習で得

られた回答を数値化・グラフ化できるようになっている。そこでの質問項目すべてが事例に直結して対応しているわけでなく，事例のなかの生活状況や環境，利用者や家族の発言や行為，他者の動きなどと質問項目を結びつけることによって，グラフ化できる汎用性のあるソフトになっている。またこの教育支援ツールを通じて演習への参加者が，事例をめぐる質問や回答から利用者の①生活状況やその情報にいかに気づくことができるのか，②支援展開過程のなかでどのような生活状況や情報に変化がみられるのか，をアセスメント課題としている点でも従来の事例研究演習とかなり違いがあるといえる。

また質問は，エコシステム構想[9]を基盤に，生活システムを階層として2領域に分割，それを順次4分野に分割，続いて8構成に分割，さらに構成内容を32の内容構造に分割，各内容構造に関連した質問を4つずつ細分類し128因子構造から構成されている。128因子情報の質問に対する回答は，5つの選択肢と「未回答」からなっている。例えば表1で示した8構成の「家族」で32内容構造のうち「理解」にある4因子の質問内容を一つ取り上げてみよう。そこには，「家族は互いに役割を持っていますか。」（家族理解－2）という問いに「①持っている，②まあまあ持っている，③あま

表1　生活エコシステム情報の構成と内容

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿　性別 ＿＿＿　年齢 ＿＿＿　職業 ＿＿＿＿＿＿

家族形態 ＿＿＿＿＿＿　居住形態 ＿＿＿＿＿＿　問題 ＿＿＿＿＿＿＿＿

生活システム 領域カテゴリー ＼ 実践要素の構成 内容情報					1 価値 態度 姿勢 志向 機運 関心 自覚	2 知識 現状 事実 実状 内容 関係 理解	3 方策 制度 政策 計画 施策 見通 私案	4 方法 取組 対応 参加 活用 協力 努力
全体	領域	分野	構成	内容	価値意識	状況認識	資源施策	対処方法
生活	1 人間	Ⅰ 当事者	〔1〕特性	A個別特性 B自己認識 C社会認識 D社会的自律性	倫理特性 自己への関心 社会への関心 生きがい意識	機能特性 自己理解 社会状況理解 目的の具体化	社会特性 自己改善計画 社会参加計画 目的達成計画	行動特性 自己改善努力 社会参加努力 目的達成努力
			〔2〕問題	A焦点 B障碍 C緊急性 D程度	問題への関心 障碍の自覚 緊急性の自覚 問題解決の姿勢	問題焦点の実状 障碍の実状 緊急性の現状 問題解決の現状	焦点への対応策 障碍改善対策 緊急への対応策 問題解決計画	焦点への取組 障碍改善努力 緊急への取組 問題解決努力
		Ⅱ 基盤	〔3〕身辺	A健康 B生計 C住居 D生活拠点	健康への関心 生計への姿勢 住居への関心 生活拠点の関心	健康の現状 生計の現状 住居の実状 生活拠点の現状	健康の維持計画 生計の維持計画 住居の維持計画 拠点での支援策	健康の維持努力 生計の維持努力 住居の維持努力 拠点での取組
			〔4〕家族	A理解 B連帯 C意欲 D社会性	家族による理解 家族連帯意識 家族の支援意識 社会への関心	家族の役割関係 連帯の現状 支援の状況 社会との関係	役割の改善計画 連帯の改善策 支援への見通 社会参加計画	役割改善の努力 連帯復元努力 支援への協力 社会参加努力
	2 環境	Ⅲ 周辺	〔5〕近辺	A近親 B近隣 C友人 Dボランティア	近親の姿勢 近隣の関心 友人の関心 Vの機運	近親との関係 近隣の理解 友人の理解 Vの支援状況	近親の支援見通 近隣の支援見通 友人の支援策 Vの支援計画	近親の支援協力 近隣の支援協力 友人の支援協力 Vの参加計画
			〔6〕資源	A支援施策 B施設機関 C行政 Dコミュニティ	支援施策の機運 施設機関の姿勢 行政の姿勢 Cの雰囲気	施策の動向 機関の実状 行政の現状 Cの実状	施策の拡充計画 機関の支援計画 行政の推進計画 Cの支援計画	施策の活用展開 機関の支援方法 行政の取組展開 Cの参加協力
		Ⅳ 支援	〔7〕機関	ASWer B他職種 Cサービス Dアクセス	SWの姿勢 他職種の姿勢 機関のSV姿勢 ACへの関心	SWの活動状況 他職種活動状況 SVの内容 ACの状況	SWの活動計画 他職種活動計画 SVの改善計画 ACの改善計画	SWの取組 他職種の取組 SVの展開 ACの改善努力
			〔8〕NW	A私的NW Bピア NW C機関NW D地域NW	NWへの関心 NWへの関心 NWへの関心 NWへの関心	NWの現状 NWの現状 NWの現状 NWの現状	NWの改善計画 NWの改善計画 NWの改善計画 NWの改善計画	NWの改善努力 NWの改善努力 NWの改善努力 NWの改善努力

注：情報はすべてソーシャルワーカーが，利用者より聴取し代弁・整理したものである。

り持っていない，④持っていない，⑤事例に情報がない」と「未回答」がある。こうした質問への回答に関しては，事例課題を読んだ受講生が自らの判断に基づいて回答することなっている。

特に演習では，受講生が事例の内容をどのように認識し判断したのかが重要であり，次に教員側が設定した課題への回答モデルとの比較考察（回答後の総合的認識や判断への共通の方向性）が，演習展開で議論する重要な課題となる。この演習には，正答があるわけではなく，教員や他の受講生，他グループとの結果のずれや相違点を演習で議論することが，アセスメントの意味や方法を考える有効な機会となると考えている。

また教育支援ツールならではの「⑤事例に情報がない」という回答は，非常に重要な意味を持っている。今回の演習で受講生がソーシャルワーカーとなってシミュレーションする際に，事例を過程として分割し，プログラムの進行に合わせて通読する形式をとっていることと関連している。初めに読んだ前半事例から理解したことと，今わからなくてもその後知らなければ支援ができないという情報が出てくるはずである。そのことに気づいていくことは重要で，それを指摘する内容として「⑤事例に情報がない」という回答を設置したのである。また「未回答」は，全く事例にその内容が出てこない場合に用いるもので，「⑤事例に情報がない」と区別している。

しかしながらこの教育支援ツールの最大の特徴は，当事者，基盤，周辺，支援の４生活分野構造から128の因子情報構造までを４種類のグラフ（棒グラフ，レーダーチャートグラフ，ドーナツグラフ，折れ線グラフ）のどれかを用いて即時に質問内容結果を表示できることにある。また32内容構造や128因子情報構造では，受講生が特に必要な因子情報だけ取り上げて比較することも可能にした。このことは，全体像の把握や支援過程の各局面（エンゲージメントから評価・終結）間の変容状況を一つの画面で比較でき，支援の流れが明確化できる点に意味がある。また回答のポイントが高くなることは，一般的な人が好印象をもつ認識や考え方を支持した状態像をイメージしていることである。グラフは，その考え方に照らし合わせてそれぞれの事例の生活像をビジュアル化したものである。このことは，人間の生活が固有なものであると論じてきたことと矛盾すると疑問を呈する人がいるかもしれない。しかしそれ自体は，グラフ作成上のものさしに過ぎず，生活の良し悪しを判定するものではない。したがって教育支援ツールを用いた演習のねらいは，グラフの全体像，個々の因子の関係性，事例の内容などについて，受講生に検討や議論する素材を提供することで，利用者の生活への実存性に深い理解や洞察力を培うことである。

3　教育支援ツールの方法

教育支援ツールの目的やその概要に続いて，ここでは若干の操作手順を解説したい。まずこの教育支援ツールのメイン画面は，図３のように実際に回答を入力するアセスメントと質問・回答や支持率などを設定するデータベースメンテナンスからなっている。受講生は，この画面の［アセスメント］をクリックすると図４のアセスメントシート画面を出すことができる。

実際に図４のアセスメントシートをクリックして質問に回答できるのは，「16.個別特性」から「47.地域NW（ネットワーク）」の32内容構造のなかにある128因子情報構造である。具体的には，32内容構造のそれぞれをクリックすると，図５のインテークシートの32内容構造にぶら下がる4つの質問と回答選択肢が現れる。そして事例を読んだ受講生は，この質問に対する回答にチェックしていく仕組みとなっている。

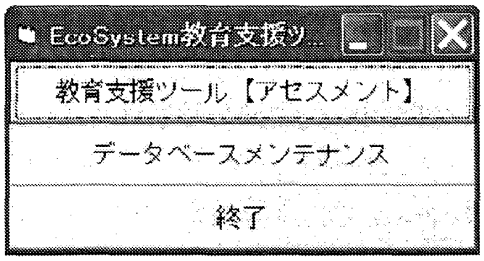

図3　メニュー

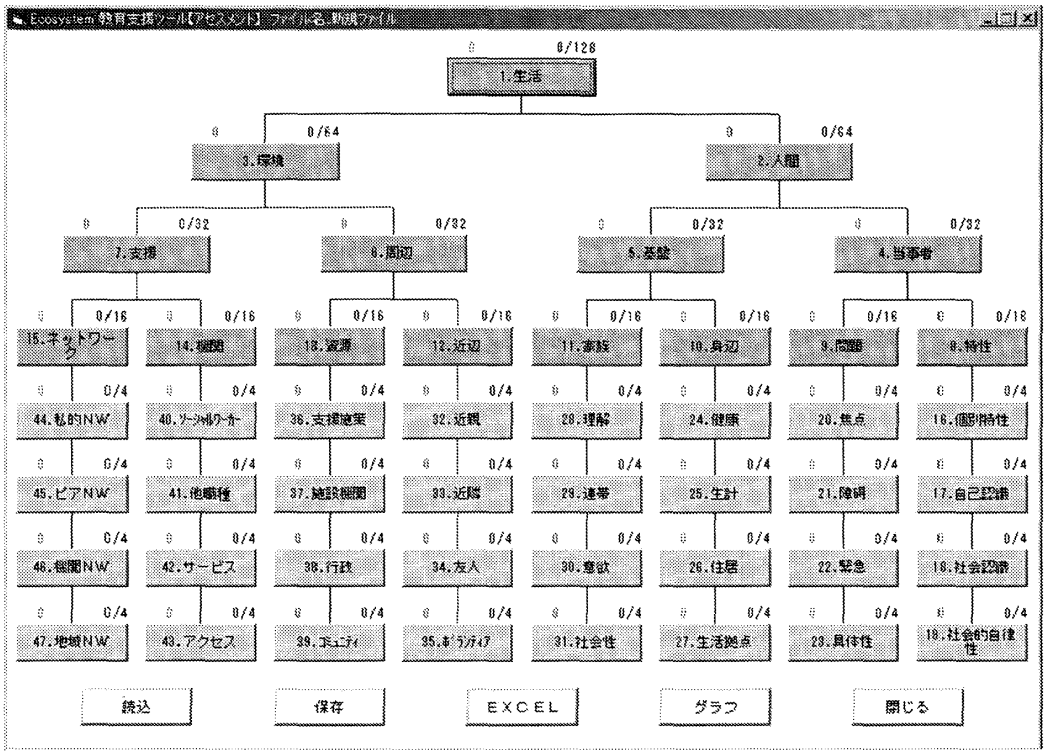

図4　アセスメントシート

またこの図5の「自己認識」の4つの質問から2つしか答えなかった場合には，図4アセスメントシートの「17.自己認識」の右上にある0/4の表示が2/4に変わるようになっている。これは，事例の内容によってすでに詳述してきたように128因子すべての質問に答えなくても，その結果を表示されるグラフに与える質問数や回答数の影響が一目でわかるようにしたものである。

今回のJA愛知中央会の職員に行った演習では，受講生が事例を読みながら128因子情報構造の質問に回答し，その結果をグラフ化していった。これは，図6のグラフ条件指定画面を活用し，4分野構造から32内容構造までの項目を棒グラフ・レーダーチャートグラフ・ドーナツグラフ・折れ線グラフで示すことができるようになっている。すでに質問に回答した結果は，CSVファイルで保存しておくことができる。特に前半事例から作成したグラフは，選択可能なファイルのなかに収納しておき，後半事例のグラフの時に取り出すと両者の比較（生活状況の変容的側面）が容易に可能になる。

このように教育支援ツールは，ソフトの改良とともに操作についてもまだ改善の余地が残されている。しかし，現段階では，限られた演習時間で初めて利用する受講生にとって操作の単純さ・簡便さ，グラフ作りの即効性が非常に評価されていたようである。

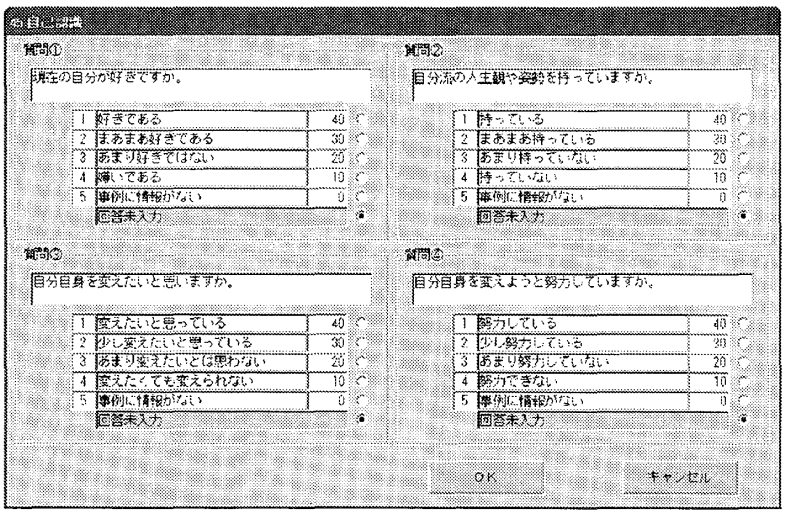

図5　インテークシート

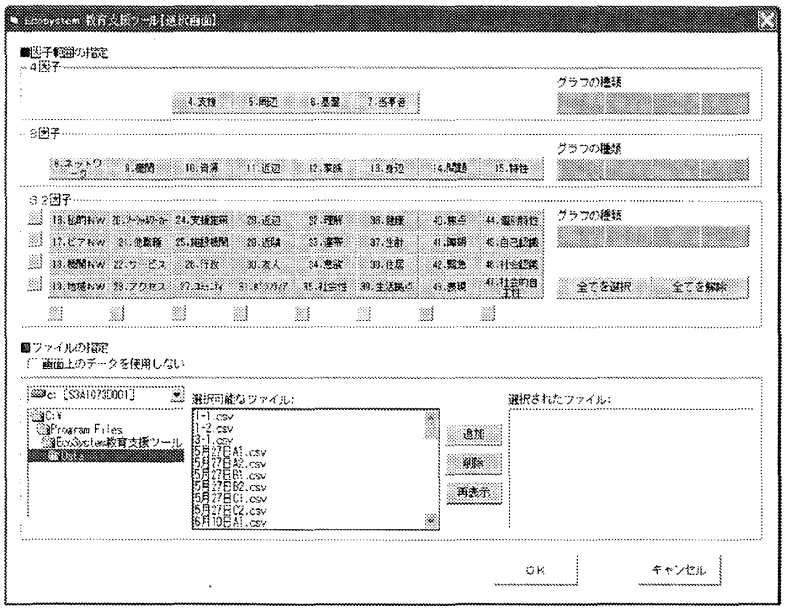

図6　グラフ条件指定画面

Ⅳ　教育支援ツールと実践スキル

1　教育支援ツールの活用

教育支援ツールは，その固有な目的や方法とともに，いかに演習教育に実践的に活用していくかということが重要な課題である。そこで教育支援ツールを活用するオリジナルなプログラムと教育者側の演習を展開する力量が問われることになる。その一つの例が表2である。このプログラムは，「在宅に戻るにはどうすればいいの……」という在宅介護支援センターのソーシャルワーカーと退院を希望している利用者の事例を用いて，2003年8月13日に3時間のJA愛知中央会職員の現任研修に使用したものである。

当日は，31名の受講生に7台の教育支援ツール搭載のパソコンを持ち込み，1グループ4～5名でプログラムを遂行していった。また各グループの操作や課題学習がスムースに進行するように，事例は蛍光ペンを活用し情報整理してもらった。わからないことが出てきた場合は，すぐ対応でき

表2　事例研究演習（支援ツールシミュレーション）プログラム

2003.8.13（JA 愛知中央会）

時　間	演　習　内　容
13：00～13：10	研究の主旨を解説
13：10～14：10	第1次アセスメント入力とグラフ作成 （グループディスカッションとグラフ作成） ＊マーカー・チェック　　FD 保存
14：10～14：30	グループ報告（画面を見ながら報告） ◎課題Ⅰについて検討 教員のグラフとの違いと共通点を確認 他のグループとの違いと共通点を確認
14：30～14：40	休　憩
14：40～15：20	第2次アセスメント入力とグラフ作成 ◎課題Ⅱについての検討 第1次アセスメントのグラフとの変化をみる 教員モデルのグラフとの違いと共通点の確認 他のグループとの違いと共通点の確認 ＊マーカー・チェック　　FD 保存
15：20～15：40	コメントとまとめ
15：40～16：00	アンケート作成

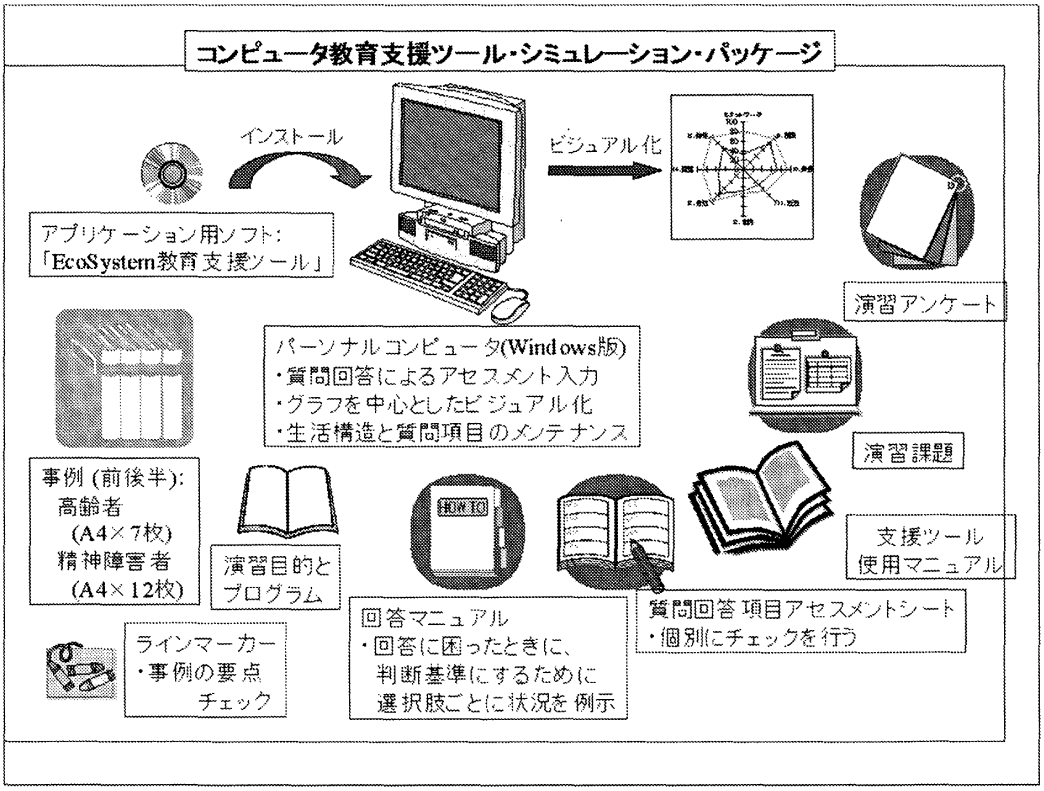

図7　教育支援ツール・シュミレーションのイメージ

るように教育支援ツールに精通しているエコシステム研究会のメンバーをグループごとに配置をした。また教育支援ツールの操作やグラフ作りが簡単であることを体験してもらうために，受講生に

は必ず操作してもらうよう指示をした。このような演習自体のイメージは，図7に示してあるとおりである。

2 実践スキルの訓練

JA愛知中央会職員の演習では，表2のプログラムでもわかるように事例を前半と後半に分けてそれぞれ課題を設定し，課題を解決するために教育支援ツールを用いてアセスメントを行っていった。特に第1回目のアセスメントでは，前半事例から①問題状況の把握を中心にすべてのグループの共通認識が可能になること，②教育支援ツールの操作に精通してもらうことを目的とし，また後半事例を用いた第2回目のアセスメントでは，③第1回目のアセスメントとの変化や変容をみること，④その後の支援へのプランニングを行ってもらうこと，⑤教員モデルのグラフ（図8）との比較考察，⑥他のグループ（図9・図10）との比較考察を目的としたのである。

詳細な演習プログラム内容の解説は，また別の機会に譲るが，これまで報告してきた結果をまとめると，教育支援ツールを実践訓練スキルとして活用する意義として次の5つの点があげられるだろう。

(1) ディスカッションの材料が事例だけでなく，コンピュータ画面に入力作業時の内容，出力されたグラフの内容などと豊富にそろっていること

(2) 事例における生活状況や変容過程を文章からだけでなく，グラフから読み取ることができること

(3) グラフで教員モデルを提示することによって，課題を設定した側がどこに着眼していたのか比較考察から明確にできること

(4) 同様に他のグループとの比較考察を通してソーシャルワーカーとしてどこに着目したか，またどこに気づいていなかったかが明確になること

(5) 全体をとおして演習時間内にグラフだけではあるが，生活状況をビジュアル化しソーシャルワーカーの思考作業に結びついた全体像の形成過程が得られたこと

しかしながら，注意しなければならないのは，教員モデルが事例演習の正答を表しているのでは

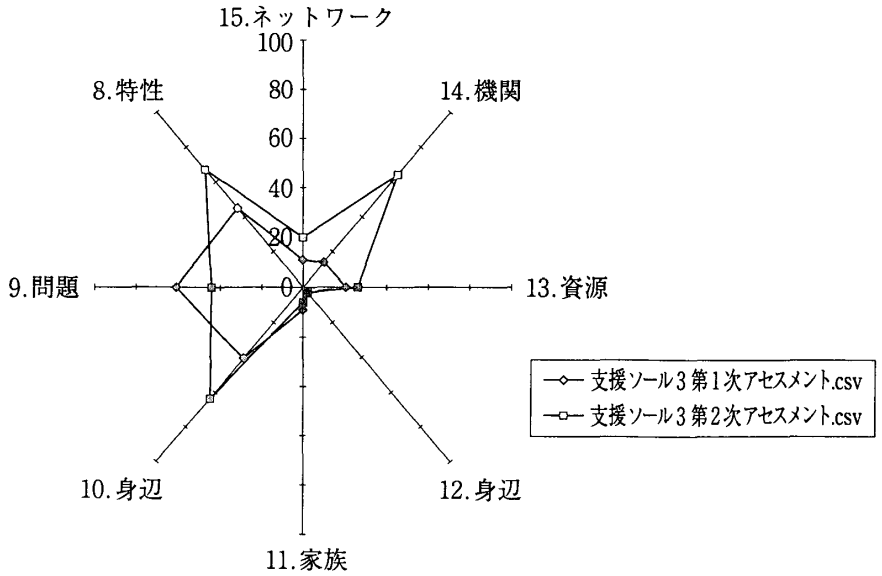

図8　教員モデル

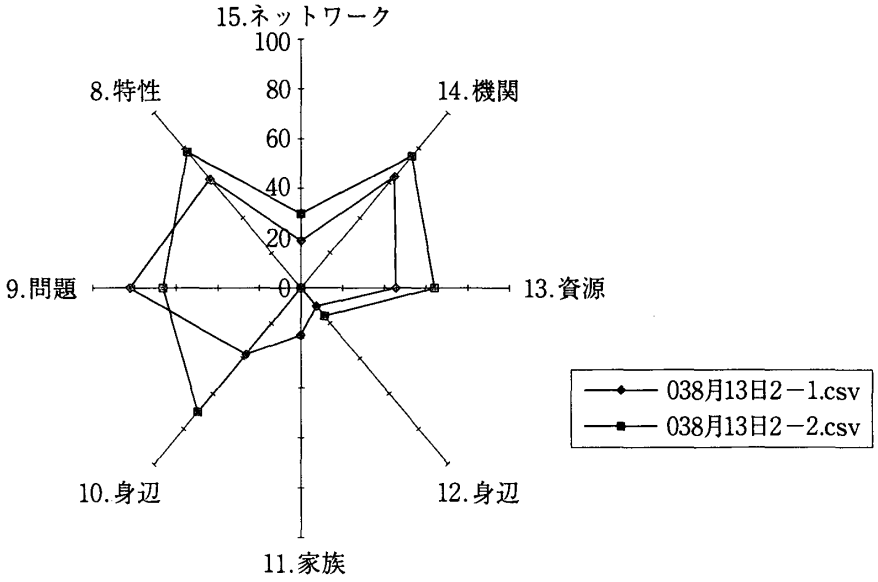

図9　受講生グループ1

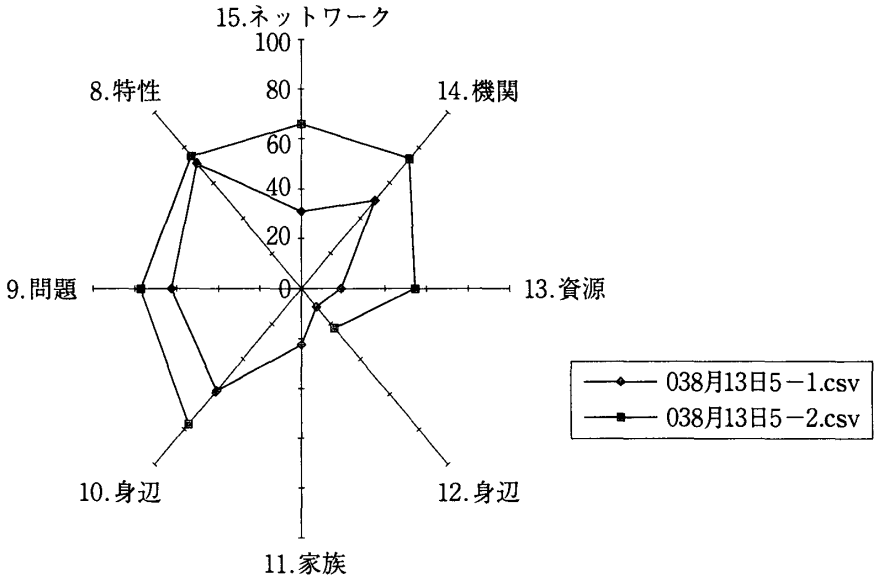

図10　受講生グループ2

ないということである。あくまで課題に着眼してアセスメント認識を行った教員側の説明材料に過ぎず，受講生との一致を求めているわけではない。たとえばそれは，事例から得た「ネットワーク」という生活構成情報を図8～図10で比較してみると理解できる。ここで図8の教員モデルでは，この事例のソーシャルワーカーが専門家同士でつながり始めたと認識しているにもかかわらず，利用者がそれぞれの専門家のネットワークに気づかず，単に各専門家からのサービス提供しか認識していないと理解し，総じてグラフのポイントが低くなっている。一方，図9の受講生はそのことに気づき，図10の受講生たちはソーシャルワーカー側の視点からネットワークを評価していたことが理解できる。この認識のずれは，演習を通じて議論されていくことになる。このような内容で演習時に討議を通じた深い考察が行われていくことを本実践スキル訓練では，期待しているからである。ここにエコシステム視座に基づく利用者の生活理解を認識する方法を導く重要な意義と考えられるのである。

3　教育支援ツールによる実践スキル訓練の可能性と今後の課題

これまでJA愛知中央会職員の演習展開から考察を進めてきたが，この演習時にアンケートをとった結果から，まず今後のコンピュータ支援に向けての教育支援ツールによる実践スキルの可能性を考えてみたい。

2002年度末の国際社会文化研究所への報告書では，実施したアンケートから129名の各大学の大学生や大学院生の約90％が，エコシステム構想を基礎とした生活の視点や生活問題の理解，生活変容への理解を「まあまあ理解できた」という段階以上で評価していて，将来のソーシャルワーカー養成に十分活用できると報告を行った。同様に今回のアンケート（2002年度の18項目のアンケートから14項目に精査したもの）の結果も総じて良い評価が得られたが，いくつかの点で今後に貴重な課題を示唆されたとように思う。そこでいくつか紹介してみると，

(1)　ツール利用により，ソーシャルワーカーの生活への視点が理解できましたか？
　　「まあまあ理解できた」以上が96.7％
(2)　ツール利用により，利用者の生活問題を具体的に理解しやすかったですか？
　　「まあまあ理解できた」以上が73.3％
(3)　利用者の生活をグラフでみることで生活全体を理解しやすかったですか？
　　「まあまあ理解できた」以上が83.9％
(4)　教員が理解した生活との認識の差異を確認できましたか？
　　「まあまあ理解できた」以上が86.7％
(5)　グラフをみることで話し合いがしやすくなりましたか？
　　「まあまあ理解できた」以上が93.5％
(6)　一回目，二回目のアセスメントを通して利用者の生活変容を理解できましたか？
　　「まあまあ理解できた」以上が100％
(7)　ツール利用により利用者の主体的な参加を期待できると思いますか？
　　「まあまあ理解できた」以上が60％
(8)　今後，現場で働くとしたらこの経験は役に立つと思いますか？
　　「まあまあ理解できた」以上が96.7％

特にこのなかで大学生や大学院生と比べ実践者グループとしての相違を2点あげることができる。その違いの特徴は，実践現場での活動経験と大きく関係しており，利用者と実践者の「参加と協働過程」の問題と課題を明確にしたともいえよう。その第1は，「2．利用者の生活問題への理解」のポイントの低さである。この点については，すでに各自が現場の実践者としての問題を規定する方法をもっていることが影響しているように思われる。この結果，逆に実践者の現任スキルとしての意義を明確化したと同時に，生活問題理解へのスキルアップと訓練方法の課題も浮かび上がったといえる。

第2に「7．教育ツール利用による利用者の主体的参加」への「まあまあ理解できた」以上が6割しかない点である。この結果については，現実の場面でどれだけ利用者参加を行っているかと関係しているように思う。実践場面でいかに利用者の主体的参加が欠落しており，それを意識化しようとする演習プログラム自体の課題が明確にされてきた。そして「8．この演習経験が現場で役立つ」と感じている人が9割以上いることは，教育支援ツール活用の意義が非常に大きいと評価して

いると考えられる。

最後にもう一度繰り返すが，本研究におけるコンピュータ支援ツールは，実践スキル訓練のための支援ツールのみならず多目的支援に活用することを想定したものである。今回の教育支援ツールを用いた実践スキル訓練の研究もその一部であるが，今後の継続研究に向けて，次のような課題を指摘することができる。

(1) 現在，すでに新しいソフト開発が進行しているが，その仕様についての確定作業と現任訓練へのさらなる実証研究の積み上げ

(2) 多様な事例の作成とそれに合わせた演習・実践スキル訓練のスタイルの構築

(3) 質問・回答内容の精緻化（これまでの実証研究を生かし，ツール利用者にイメージしやすい・わかりやすい表現や用語の整理）

(4) グラフ化やビジュアル化への新たな展開，グラフ表示への課題，新たなビジュアル化方法の検討など

(5) 事例の提示方法の工夫，DVDによる作成，ツール画面上での通読可能に向けた工夫など

(6) エコシステム研究会スタッフが受講生への実証研究を継続していくのみならず，演習を実施する教育者側の養成や例示集等の作成など

である。

エコシステム構想という新しい考え方についての演習であるという教育者側の理解がないと，この教育支援ツール演習の目的が半減してしまうからである。今後は，これらの課題をふまえながら現場実践者，利用者，演習プログラムを進行し教育する側への実証研究を継続し，ソーシャルワーク実践で活用可能な多目的コンピュータ支援ツールを完成し，利用者支援への課題の科学化と専門化の期待に応えたい。（中村佐織）

注

1) 太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館　1999年　13頁
2) 太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規　1999年　7－11頁
3) 太田義弘「ソーシャルワーク実践研究とエコシステム構想の課題」龍谷大学『社会学部紀要』第20号　2002年
4) 太田義弘「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」龍谷大学『社会学部紀要』第22号　2003年
5) 太田義弘「支援科学としてのソーシャルワーク実践と方法」『ソーシャルワーク研究』Vol. 28　No. 2　相川書房　2002年　33－36頁
6) エコシステム視座から生活問題を理解する場合，問題解決のために焦点を当てなければならない人は，福祉サービスの利用者とは限らない。それゆえ利用者システムとは，生活問題が時間的流れや環境的状況によって変化していくことを視野にいれながら，問題解決の当事者としての人（人たち）の状態を捉えた用語である。
7) 中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント―コンピュータ教育支援ツールの研究―』相川書房　2002年　154頁
8) 同書　47－50頁
9) 太田義弘　前掲書5)論文　36－40頁